※館野哲編著『韓国の暮らしと文化を知るための70章』（明石書店、2012年）

66

日本の農山村に残る朝鮮半島の生活文化

★信州・伊那谷からのレポート★

近年、日本における韓国の大衆文化や食文化の影響力には、計り知れないものがある。ごく普通の女性たちのほうが、私などよりは韓流ドラマの作品や俳優のことに詳しいし、意外な人が言葉まで習っていて驚かされることも少なくない。かつて韓国映画は商業ベースに乗らず、公共施設で数日間だけ上映されたこともあったし、朝鮮語を教える機関がわずかしかない条件のもとで、自主講座など、学ぶ場をみずから作り出して学んだ人たちもいた。そうしたことは、いまや過去の話である。

もちろん、苦労して追い求めた人たちの強い思い入れからすると、現在の交流に薄っぺらなものが散見されるのは確かだが、大衆化するとはそういうことだし、また歴史や政治など、特定の通路を経なければ隣国のことが語れなかった時代からすると、今のほうが健全であるとも言えるだろう。時代の歯車が大きくまわった感じがする。

しかし、考えてみると、日本と朝鮮半島には有史以来のつながりがある。近代に限っても、戦前から多くの朝鮮人が日本内地に渡り、さまざまな仕事に従事したし、逆に植民者として朝鮮半島で暮らした経験をもつ日本人も多い。つまり、日本と朝

鮮半島との交流は、決して新しい現象ではないのである。植民地の時代、朝鮮人と日本人との間に対立や衝突があったのは事実だが、在日朝鮮人の自伝などを読むと、人間的な触れ合いの話もまた必ずと言っていいほど出てくる。とりわけ庶民同士の交流が、現在にも何らかの痕跡を留めているのではなかろうか？

そんなことを考えながら、長野県南部の飯田・下伊那地方にしばしば出かけている。というのは、勤務している大学で、今年からここを舞台に留学生を主対象とする「国内研修」（8泊9日）を実施することになり、私がその責任者になったからである。加害と被害の入り交じった満州移民や、三信鉄道（現在の飯田線の一部）建設に多大な貢献をしたアイヌの測量士カネトのことなど、この地域の外国や異民族との関係を調べ、研修の素材を集めている。そのなかで興味深い事実にいくつか出くわした。

たとえば、飯田・下伊那の地元出版物をみると、「朝鮮セイタ」とか「朝鮮ショイゲタ」に関する記述や写真がしばしば目につく。セイタ・ショイゲタとは、山仕事をする際に荷物を運ぶ背負子のことだが、それを朝鮮式に改良したものが、戦後のある時期まで使われていたのである。というのは、この地域には戦前、草刈りや炭焼きの季節労働者として朝鮮人が多数入っていたからだ。草刈りに関していうと、朝鮮人は箒で掃いたようにきれいに刈るので、日本人がやった作業とは違うことが一目瞭然だったという証言もある（飯田市教育委員会『失われた山村の生活：長野県飯田市松川入』1976年）。そうした彼らが使っていたチゲ（背負子）が便利だということで、地元の人々が戦後も改良を加えて使い続けたのである。荷物を載せる二本の棒が斜めに伸びており、長い脚が立ち上がるのに便利なので好評だったようだ。

朝鮮ショイゲタ。1955年頃
[売木村『ふるさと売木村の博物誌』、1998年]

これで思い出すのは、故辛基秀の長編記録映画『解放の日まで』（1980年）である。映画には朝鮮人が関わった戦前の労働運動などがいくつか取り上げられていたが、そのうちのひとつが、朝鮮人労働者が多数従事した前述の三信鉄道の最南端部分（愛知県）の争議（1930年）だった。無慈悲な弾圧を加えた会社や警察とはちがい、地元の農民からは働いても給料がまともに支払われない朝鮮人の立場に同情して、支援をしたことが描かれていた。その最後の場面で、地元の女性たちは、朝鮮人の使っていた洗濯棒（ショイゲタ）を使うと汚れがよく落ちるといって、戦後、電気洗濯機が普及する頃までこれを重宝がったことにも触れていた。

飯田市出身の知人は、面白い事実をもうひとつ教えてくれた。旧南信濃村（2005年に飯田市と合併）の和田にある「肉のスズキヤ」は、肉をタレに漬けて焼く方法を朝鮮人から教わったことを、店の宣伝のなかで明らかにしているという。研修の下見の際にさっそく訪れて、店のリーフレットをいただくと、「創業者夫婦は、朝鮮の人々から『タレ揉み』を学び」、地元の人々の口に合うタレを開発して味付き肉を売り出したと明記しているではないか。和田周辺も戦前、近くの飯島発電所工事をはじめ、朝鮮人が多数働かされていたので、そうしたなかで教わったものであろう。もっとも、店の

主人の話によると、この事実を最近、ある雑誌記者に語ったところ、出来上がった雑誌では「朝鮮の人々」ではなく、たんなる「外国の人」になっていたと苦笑していたが……。

いずれにしても、これはこの地域にかつて朝鮮人が入ったことによって、朝鮮半島の生活文化が形を変え、その後も庶民の生活のなかに残った具体例と言えよう。どれも生活道具や食べ物を媒介にした、日・朝の庶民同士の日常の接触や交流が推測され、微笑ましくもあるし、貴重な事実とも言えるだろう。

そんな埋もれた史実をこれからも掘り起こしていきたいし、日本と朝鮮半島の関係史を語る際に、そうした地方の農山村における庶民同士の交流にも、目配りしなければならないと思う。

最後に、当時この地方で詠まれた短歌をひとつ紹介しておきたい。場所は平谷村、つまり下伊那郡の南西部に属する高地の寒村で、現在の人口は長野県下で最少の550人ほど。歌ったのは林芋村（1886～1929年）という小学教師である。

「運動会に　朝鮮女　唯一人　白き服して　吾子走る見つ」

不慮の事故で亡くなり、没後80年以上になるいまでも、教育者として子どもを思うその熱情から、平谷村では知らない人がいないほどの人物である林芋村先生が、このとき何を思ったかは定かでない。けれども、この歌からは、異国である長野県南部の山間の小学校の運動会で、白いチマチョゴリに身を包んだ母親が、わが子の走る姿を静かに見守っている像が鮮明に浮かび上がり、そのやや不安げな心情までも伝わってくるのであり、想像力をさまざまに掻き立てられる。

（高柳俊男）